特集

# がんばれ！北海道

開拓の群像特集

合田 一道

## 歴史から見えるもの㉗

## 日本で初の種痘を施す　中川 五郎治

中川五郎治

天然痘は痘瘡とも呼ばれ、昔は多くの人々の命を奪いました。たとえ助かっても、顔にあばたが残ったので、ひどく恐れられました。この病を克服したのが中川五郎治という人です。

五郎治は漁師ですが、ロシアにだ捕されて抑留中に、医学書で独学し、帰国して松前で種痘を施したのです。わが国で初めてのもので、名声は京都にまで鳴り響いたといいます。

五郎治は陸奥国川内村（現青森県むつ市）の出身で、若いころから蝦夷地（えとろふ）（北海道）松前に渡り、栖原庄丙衛の世話で択捉島の漁場に勤めました。働き者で、番人から番人小頭になり、漁場を取り仕切りました。

文化四年（一八〇七）四月二十三日、突然、ロシア人が大挙して番屋を襲い、物資を奪ったうえ、番人らを捕らえてシベリアに連行したのです。この中に四十歳になる五郎治も含まれていました。

シベリアの抑留生活は五年間に及び、この間、五郎治は脱走を企てて失敗し、ヤクーツクに送られました。

この途中、五郎治はロシア人の商家に一泊しますが、書棚に本の中に種痘の本が並んでいるのを見つけます。抑留生活でロシア語が読めるようになっていた五郎治は、この本を貰い受けます。そしてヤクーツクの医師に師事して種痘の医療を学び、牛痘を人体に植えつけて天然痘に対する免疫力をつけるという医療法を身につけました。

この時期、南部藩は国後島に上陸したロシア艦ディアナ号の艦将ゴローニンを逮捕、抑留しました。ロシアはその返還交渉に、五郎治を当てようと考え、国後島へ移します。種痘法を取得したのはこの途中ともいわれています。

五郎治は国後島に着くなり、ロシア側の要求する即時釈放を伝えましたが、容易に話は進展しませんでした。そのうち五郎治は隙を見て逃げだし、そのまま姿をくらましたのでした。

憮然となったロシア側はこんどは高田屋嘉兵衛を逮捕して、二度目の使者にし、結局、ゴローニンは釈放されることになるのです。

逃れた五郎治は松前に舞い戻ると、幕府の松前奉行お抱えの足軽に取り立てられました。自ら種痘の研究を進めるとともに、松前、箱館の医者にも種痘の方法を伝授したのです。五郎治が持ち帰った種痘の本はオランダ語通訳の馬場貞由が翻訳して『遁花秘訣（とんかひけつ）』として出版されました。わが国におけるジェンナー種痘法の最初の紹介書で、ジェンナーが出版してまだ十五年しか経っていませんでした。

幕府が蝦夷地を松前に返したので、五郎治は松前藩に仕えますが、文政七年（一八二四）に天然痘が蔓延した時は、大勢の人々に種痘を施し、その命を救いました。

天保二年（一八三二）には岩内地方で天然痘が大流行し、天保六年（一八三六）には蝦夷地全域に蔓延しました。そのたびに五郎治は、人々を集めて種痘を施し、蔓延するのを少しでも防いだのでした。

中川五郎治顕彰碑（松前町）

◆プロフィール◆

昭和九年（一九三四）、空知郡上砂川町生まれ。北海道新聞に入社し、道内各地を回る。在職中からノンフィクション作品を発表。『定山坊行方不明の謎』で北海道ノンフィクション大賞を受賞。退職後は札幌大学文化学部講師。著書は『日本史の現場検証』『人間登場～北の歴史を彩る』『大君の刀』など。